

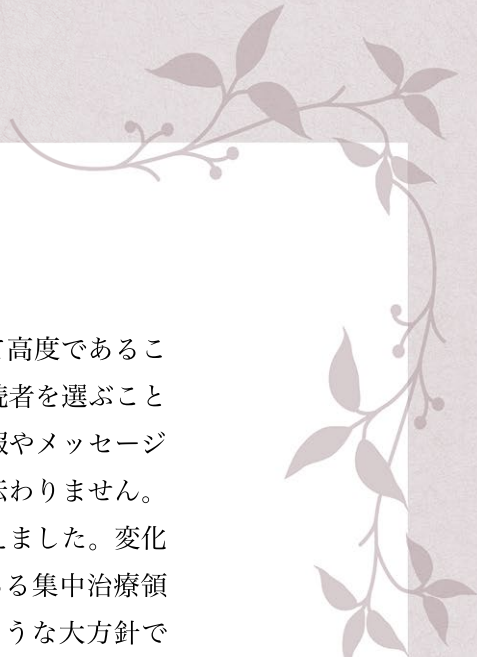


“頑張って読む INTENSIVIST” から “早く次が読みたい INTENSIVIST” へ

INTENSIVIST 誌は 2009 年に創刊され、本邦の集中治療の世界に大きな衝撃を与えました。「あの施設がこうやっているから」「自分たちはこうやってきたから」「あの大家が言っているから」「病態生理学的にはそのはずだから」というそれまでの世界に、「それはむしろ予後が悪くなることが証明されています!」「現在はここまでが証明されていて、それ以上は分かりません、謙虚になりなさい!」と殴り込みをかけました。

本邦の偉大な先人たちの多大な努力で培われた集中治療の土壌と INTENSIVIST 誌が化学反応を起こし、国際標準と考えられている診療と本邦の診療の乖離や、施設間でのばらつきは、以前と比べると格段に小さくなったように感じます。現在は、日常診療における判断の材料としてエビデンスを重視することや、文献に批判的吟味を加えながら読むことは、少なくとも集中治療領域では珍しいことではなくなり、今までの INTENSIVIST 誌がもつ特殊性や価値は相対的に小さくなり、一つの時代を築くことでその役割を成し遂げたと考えます。

一方、時代はさらに進み、「その論文の PICO の P が本当に目の前の患者に当てはまるのか?」「その論文の PICO の O が本当に目の前の患者にとって重要なのか?」を考えて診療を個別化することの重要性が強調されるようになってきました。さらに、無作為化比較試験 (RCT) では証明されていない多くのクリニカルクエスチョンに対する判断をどのように行うかについて、「他の施設はどうしているか?」「あの大家はどうしているのか?」「病態生理学的にはどうなのか?」という日常診療で多くの医療従事者が直感的に求める情報の価値が再認識されていることを感じます。ただし、これは皮肉的な回帰の現象ではなく、エビデンスの重要性が認識されている現在では、むしろ集中治療関係者の思考がより発展、成熟し、次のフェーズに移行しつつあることの表れであると見ることができるかもしれません。



INTENSIVIST 誌そのものに目を向けると、内容が極めて高度であること、情報量が多いこと、読むための労力が大きいこと、読者を選ぶことなどについて以前から指摘をされていました。大切な情報やメッセージがどれだけ書かれていても、読まれなければその内容は伝わりません。より多くの読者に読まれるための大胆な変革が必要と考えました。変化する時代のなかで、JSEPTIC にとっての最大の使命である集中治療領域における教育という役割を維持するために、以下のような大方針で INTENSIVIST 誌が生まれ変わるようになりました。

- 各特集において、日常診療で重要と考えられる項目に焦点を当てる
- 「エビデンスとして分かっていること、分かっていることを明確にする」という今までの INTENSIVIST 誌の柱は堅持する
- 今までのような、膨大な数の参考文献の紹介や論文内容の詳細な説明を本誌の内容の中心に置くことはせず、エビデンスレビューブック的な色合いを弱くする
- 「実臨床ではどうすれば良いのか？」という問いに対して、私見であることを明確にしたうえでエキスパートの経験に基づいた実践例や回答例を十分に掲載する
- 以前の特集とテーマが重複するとしても、2～3 年周期で重要な特集テーマを繰り返す
- 読み物として面白い、気楽なコンテンツを掲載する

2024 年 1 月発刊の「ARDS の今を語り尽くす」特集から表紙も一新され、“頑張って読む INTENSIVIST” から、“早く次が読みたい INTENSIVIST” に生まれ変わります。

新しい INTENSIVIST 誌をよろしくお願いいたします。

JSEPTIC 理事長
則末泰博